近世四声論 拾遺

上野和昭

一

江戸時代の学者が四声をどのように認識していたか。金田一春彦（一九七四、二一一頁）は、左表のごとく「契沖・宣長」「文雄・成章」「貞丈」の三種に分類して、四声とその具体的な音調との対応関係をまとめて紹介している。そのうちの伊勢貞丈（一七一七～八四）の四声認識は、貞丈没後にまとめられた『安斎随筆』巻二十「音の四聲」から知られることで、いまその箇所を引用すれば左のようである（『故實叢書』九）。

人／音調	高く平らな音調	下降する音調	上昇する音調
契沖・宣長	上声	平声	去声
文雄・成章	平声	上声	去声
貞丈	（平声）	去声	上声
（語例）	「端」（「鼻」）	「橋」（「花」）	「箸」

音の四聲 とは平聲上聲去聲入聲なり 平上去の三聲は音を引き延べて唱ふるに其の音の上り下りの差別なり 例へばカキクケコの五つにていはゞカァキィクゥケェコォと音を引き延べて唱ふるにカァのアを長く引きて唱ふるは平聲なり カを長く引かずしてアを強く張りて唱ふるは上聲なり アを弱く弛めて唱ふるは去聲也 右の如く唱ふるは平聲は上り下りなく平かにゆるやかに聞ゆ 上聲はしり聲上りて強く聞ゆ 去聲はしり聲下りて弱く聞ゆ 去聲は聲の末の消え去る心なり 入聲はカッキックッケッコッとしり聲にツの音を含みたるが如くせわしく逼りて聞ゆるなり 入の声は屈り入りて伸びざる意なり 入聲の字はしり聲にフツクチキの五の音を含んでしり聲つまるなり 唐音にては彌平上去入明かに分るなり 和語にも四聲あるが故に古事記に本文の間々に去上等の字を付けたり 和語にても常の言語に上聲去聲もあり平聲入聲もあり 今世の俗語に

平聲は多く田舎調にあり 歌を謠ふに至りては四聲明らかに分るゝなり 和語四聲は五畿内の人の詞に月をツキと云ふは去聲なり キの音下りて弱し 關東の人の詞には上聲なり キの音上りて強し 畿内の人花をハナと云ふは去聲なり ナの音下りて弱し 關東の人の詞には上聲なり ナの音上りて強し 畿内の人の鼻をハナと云ふは上聲なり ナの音上りて強し 關東の詞にはナの音下りて弱し……　（巻之二十）

ここに畿内と関東との音調を対比して述べるところは、それぞれの現代アクセントに照らして納得のいくものであるが、「鼻」についてだけは疑わしい情報をもとに説明しているようにみえる。

また、金田一が上掲の表のなかで、貞丈の「平声」を括弧でくくるのは、貞丈がこれを「上り下りなく平かにゆるやかに聞ゆ」と述べるだけで、かならずしも「高く平らな音調」とは記さなかったからかとも思われるが、契沖なども事情は同じことであるから、その理由は定かでない。

ところで金田一は、貞丈の四声認識に否定的であって、次のように記して後世の学者がこれに「災いされた」と述べている。

貞丈のものは、上声・去声という文字の意味を頭で考え、上声は上る声……と解したもので、恐らく平声は平らな声と考えていたにちがいない。これは一番当たっていそうに見えるが、実は一番拠り所も伝統もない見方であった。（二二一頁）

しかし、前田富祺（一九六七）は、金田一よりもさきに「音価には問題はあるが、文雄同様、唐音の四声を重んじている」（九～一〇頁）として、その「拠り所」を指摘していた。

貞丈が当時の中国語音（唐音）の四声をどのように認識していたかは、『安斎随筆』巻三十一「詩にふしつくる事」の項からも明らかである（秋永一枝一九八三、七七～七八頁）。和語の四声も、これをもとに平上去それぞれの音調を想定していたことは、さきの引用部分から知られる。

詩にふしつくる事　唐にても詩にふしをつけてうたふなり 其のふしは平上去入の四聲に從ひてふし出でくるなり うたふ時のふしの爲に平仄韻字のおき所を定めたるなり 此のおき所違へばふしたがひてうたはれぬなり 平聲は聲の調字平らかにて上りも下りもせずシリ聲を長く引くなり 上聲はシリ聲上るなり 去聲は下るなり 入聲はシリ聲ツマルなり……唐音を學ばずして詩作るは無益の事なり 唐音の四聲たとへば

シリコエナカクヒク　シリコエ上ル　シリコエサガル　シリコエツマル

┃平聲　┘上聲　┐去聲　●入聲

音タヒラカナリ

（巻之三十一）

伊勢貞丈は幕臣にして有職故実家として有名である。この

書については「宝暦から天明にかけての徴証を重んじる文献研究の水準を示している。ただ内容により、他の研究書や随筆の抄出だけの記事があるので、全体を貞丈の著述として取り扱うことには注意を要する」（『国史大辞典』一九七九、鈴木敬三執筆）という指摘があるが、同様なことが記された先行文献を知らないので、この箇所の記述も貞丈自身の考えを記したものとみておく。

二

さて、貞丈に後れて同様な四声認識を著したものに石原正明（一七六〇～一八二二）の『年々随筆』がある。

から国の四聲といふは・上聲は・いひはしめひくゝやはらかなるか・末やうやくにあかりつよくなる声なり・平声は・もとする〻同しほと・去声は・はしめつよく高きか・やう〳〵にさかる声也・聲のさかるさま・遠さかり行心ちするものなるゆゑ・去といふ・入聲もさかる声也・そのさかる事直に急にして・末つまるはかりの声也・つまる声は喉のうちへ更に入行心ちする故・入といふ・去聲と入聲とはおなしくさかる声なる中に・去はやう〳〵にさかる故・アイウと引・ンとはぬる韵（ヒヽキ）あり・入は直にさかる故・息つまるやうになりて・餘韵は隠々として声の喉へかへる（サカ）間にあり・皇國の詞には平上去の三あり・その上り去るさまいたうきは〳〵しからす・から国の声にては・同し平聲といふほとなるへし・しかさかる事正しからさる故・いかにいひなしてもつまる事なけれは・入はなし・たゝ俗語に・人かサッサとはしる・火かクワックワともゆるといふたくひ・たま〳〵入声なれと・それもいくつもかさぬる事は・息つまりていひ難し・そは餘韵なき故也・から国にては・餘韵咽喉の間にありて・息のつまる事なきゆゑ・いくつも重ねていはるれとも・猶詩賦のたくひ・しらへよく調るには・多くかさねては・あしかるわさ也とそ・

（辛酉〈一八〇一〉随筆（二）、一四オ～ウ）

石原正明は、まず「から国の四聲（サカ）」から説きはじめ、「皇國の詞（ズ）」（唐）におよんで「その上り去るさまいたうきは（甚）〳〵しからす・から国の声にては・同し平聲（じ）といふほとなるへし（べ）」（程）と述べる。すなわち、和語の音調は中国語ほどに明瞭なものでなく、およそ中国語の「平聲」すなわち「もとする〻同しほと」に聞かれる高低の幅に、和語の下降調（正明のいわゆる「去声」）も上昇調（おなじく「上声」）もおさまるものと聞かれたらしい。それくらい和語の四声を聞きわけることが難しかったということか。また「去聲と入聲とはおなしくさかる声」（同下）というところは、貞丈説に正明が付け加えたものであろう。彼は宣長門下の人であったが、師説を必ずしもよく理解していなかったようにも思われるが、もともと宣長自身が紛らわしく論じているのであって、『漢字三音考』（五五ウ）には、

貞丈説と同じような記述がみられる。

彼はまた、右のごとき文字の四声とは別に「よみさまの上り去り」ということをも論じている。

字音によみつくるスル セル などの類・あるひは清あるひは濁は・平上去によれり・そはもしの平上去にはあらて・よみさまの上り去りなり・去聲は・いひ初る時つよくて・やう〳〵さかり行声なる故・發語の勢開口のところに懸て・よみつくるもしまてに及はねは・語のまゝにすまるゝ也・上声ははしめ柔にて漸につよく上る声なる故・發語の勢よみつくるもしまて残りて・その勢にひかれて濁らるゝ也・便童蒙ニ・弁陰陽ヲ・この二ツいひ試て・発語の輕重をしるへき也・平聲のは・もとする〻おなしほとなる中に・いさゝか上声へちかきはにこるなるへし・此事字音に限たる事にはあらす・よろつの詞みな此定也・たとへは辛苦なる事をからくしてといへは・からの二もし去声なるゆゑ・發語の勢こゝに懸て・しもしは語のまゝにすまるゝを・言便にからうじてといへは・かもし柔軟にてらもしうもしやう〳〵にあかりゆく故・発語の勢しもしに及ひて・それにひかれて濁らるゝ也・幾度もいひ試れはおしへを待すしてよくしらるゝ事そ

（同、十五ウ～十六ウ）

ここに述べるところは、字音語につづくスル、セルのようなものは清む場合もあれば濁る場合もあるが、それは「よみさまの平上去」による。発語（言いはじめのことば）が「去声」、すなわち下降調の場合は、その勢いが発語のところにとどまって、うしろに付く語にまで及ばないので、後続語はもとのままに清んでよまれるのであり、発語が「上声」、すなわち上昇調の場合は、発語の勢が後続語にまで残って（及んで）連濁する。発語が「平声」の場合は「いささか上声へちかきはにこるなるへし」というのである。(二)

正明は、このことが字音語だけでなく和語にも適用できる「定」であるとして、「からくして」は、「から」の部分が下降調であるから、あとの「し」がもとのままに清むのだとし、「からうじて」は「からう」の部分が上昇調であるから、発語の勢が「し」にまで及んで濁るのだという。(三)

ちなみに正明の連濁論は、すでに金田一春彦（一九七六）が紹介しているところである。

三

貞丈流の四声認識をもって、少なからぬ語の音調を説明しようとしたものに『言語国訛』（著者未詳、宝暦八年〈一七五八〉成か）がある。この書については、すでに秋永一枝（一九八三）による影印版があり、これによって同書の全容を知ることができる。そこに記された四声認識は以下のとおり。

文字ノ聲ノアゲサゲハ平上去入ノ四聲ニ分テ上下タイラカナル聲下カラアガル聲上カラ去ル聲ツメテ入ル聲

ナラデハナキ物ナル共次清清濁ノ品アリテ少ヅヽノ響ハ違ル事トゾ箇様ニ分チアル事ナレトモ古来 謡物ノ聲ヲ見ルニ文字ノ四声ニ合ザル所モ畧見ヘタリ是ハ唱習テ改カタキ物ナリ　（一ウ）

右によれば、この書の四声は平上去入の順に「上下タイラカナル聲」「下カラアガル聲」「上カラ去ル聲」「ツメテ入ル聲」と説明されている。これらはみな貞丈流とみられる。

さらに、この書に特徴的なこととして、（一）「平ヲ兼」「上ヲ兼」「平上ヲ兼」「上平ヲ兼」「去声ト平声ヲ兼」など、（二）「平上ノ間」「上平ノ間」というような説明のあることが注目される。

（一）殿　殿ハ去声ト平声ヲ兼タル物也　四オ6
　　縁　平上ヲ兼 居所時ハヱント唱　四ウ4
　　夜　ヨルヨモスカラハ上声ニ響 夜半ハ上平ヲ兼テ響　四ウ10
　　院　平ヲ兼　院宣　六ウ4
　　新　上ニ平ヲ兼　六ウ10

「縁」は、関係をあらわす場合は呉音去声。居所をあらわす場合は呉音平声か。「平上ヲ兼」とは、この両様の音調を想起して述べたものであろう。「院」は同書の声譜に「去声」の音調（下降調）をあらわし、「平ヲ兼」とは「院宣」のときに「院」が平進調であることをいうものという。(四)「新」に付せられた声譜は平進調らしいが、「上ニ平ヲ兼」というときには、たとえば「新帝（×上コ×）」（平家正節、五上厳幸九1口説）(五)にある上昇調も思いうかべていたのであろう。

和語の「夜」については、ヨルもヨモスガラも、語頭はいずれも上昇調にはじまる（秋永一九八三）。これに対して「夜半」は上昇調にも平進調にも実現することがあったということか。(六)「殿」の声譜は下降調で「去声」の音調である。「平声」とあるのは、たとえば「大納言殿（上上×××××）」（平家正節、三上少還九4口説）のような音調を記述したものであろう。

（二）性　平上ノ間ニ唱フ 生モ同　四オ2
　　守　平上ノ間へ響　四オ9
　　今日　上平ノ間へ響　四ウ1
　　蘭　平上ノ間　四ウ2

「性」をセイとよめば漢音去声。「守」は『類聚名義抄』（観智院本法下二八オ2）に「守　カミ〈平上〉」(七)とある。また「今日」は二拍名詞第四類の語の一つ。「蘭」は呉音去声である。いずれも現代からみれば二拍名詞相当で○●型と考えられる（高拍を●、低拍を○であらわす。以下同様）。これらの音調は、ここではすべて「上声」（上昇調）○●であるが、後ろに高くはじまる語がつづくと、高さをさらに後ろに送って○○（●…）のような音調になる。このとき、その「上声」

の語は○○となっていて「上下タイラカナル聲」すなわち「平声」というにふさわしい音調に聞かれる。このように「平上ノ間」とされた音調は、同じ語であっても、「平声」にも「上声」にも実現するようなものを取りあげかのように考えられる。しかし、それならば前項のごとく「兼ヌ」と記せばよかったのではないか。

もともと○●であれ○○であれ、これは史的観点からあらわしたアクセント表示であって、『言語国訛』の編者が同じように認識していたかどうかは、また別の問題である。

思うにこれは、いまからみて○●と捉えられる音調を○◎のように聞いていたことを述べたのであろう（◎は●と○の中間の高さの拍をあらわす）。それを編者は自身の四声認識に照らして「上声」でもなく「平声」でもない、それらの中間の音調と認識したのではないか。そして、それを「上平ノ間」「平上ノ間」と注記したものであろう。

（一）は、ある語が単独の場合や複合語の成分になった場合などで音調が変わることを、「兼ヌ」と表現したものであるが、（二）は、今日われわれが上昇調○●とみている音調を、編者が○◎または◎●などのの中間的音調と聞いて、それを「平声」（平進調）と「上声」（上昇調）の中間（「平上ノ間」など）と捉えたのである。秋永（一九八三、七五頁）は「あまり上昇がはげしくないと解したか」と説明する。（八）

四

右に述べたように平曲伝書には貞丈流の四声認識とみとめられるものがあったが、能楽関係の伝書には、そのようなものはないようである。

能楽伝書で四声認識が分かるものは、これまで金春禅竹（一四〇五～七〇頃）による「五音三曲集」（長禄四年〈一四六〇〉金春氏信奥書）が取りあげられてきた。（九）

四性之事　平 去 □ 上 入 の四正なり。去・入性は、下手のこのむところなり。「悦をのべし君が代のすぐなるみちをあらはす」の「が」の字なり。すぐにいふべき性をおとすなり。おとすは入性なり。おとすがわろきぞといへば、あぐる、去性に又なるなり。正路のすぐなる性を可レ知なり。

右の本文は『金春古傳書集成』（一八〇頁）によるものであるが、四声図は附載写真（一九六頁）においても、このとおりに確認される。これについて前田富祺（一九六五）は「この四声図は通例のものと異なり、平が右上になるが、あるいは誤記であろうか」（三六頁）という。たしかに、禅竹の子の宗筠（一四三二～八〇）の「宗筠袖下」（『金春古傳書集成』五三七頁）に載る四声図は、左下を平とする一般的なものであるから、禅竹の四声図は書写の際の誤りとみてよいであろ

う。

また、右の「君が代」の謡い方について「すぐにいふべき性をおとすなり。おとすは入性なり。おとすがわろきぞといへば、あぐる、去性に又なるなり」とあることを解釈して、前田は「「入声」をいわゆる「フツクチキ」の韻尾のついたものと考えると問題だが、下降調と考えると良いし、「去声」が上昇調を示すと考えると、これらの例がうまく理解される」（三八頁）という。

これについて坂本清恵（一九九七＝二〇〇〇）は、前田説をみとめつつも、さらに考察をすすめて「入声を助詞「が」の拍内下降とできなくもないが、節付け（曲調）について述べた部分ではなく、四声についての記述であることから、名詞「君」から「が」にかけての下降を入声と説明したものとみる」（一一五～六頁）と述べる。

前田（一九六五、三八頁）にならって平声を低平調、上声を高平調、また去声を上昇調、入声を下降調とみれば、「君が代」の「が」に傍記された「平上よし」「去入わるし」には、曲調（上昇調と下降調）を廃そうとする意図があったのではないかと考えられる。そう考えると「正路のすぐなる性を可レ知なり」という記述は分かりやすい。

ところで、謡曲伝書の『音曲玉淵集』（三浦庚妥、享保一二年〈一七二七〉刊）には、四声それぞれがいかなる音調と対応するのか（四声認識）について明確な記載がないが、『謳曲英華抄』（二松軒、明和八年〈一七七一〉序）には、左のように二項にわたって関係するところがある（高羽五郎油印本一九六六）。

○ 去上字平平入 四聲の聲をさすことかくのことし 例をいはゞ 公平 孔上 貢去 谷入 かくのことし 平聲は聲の本末あからすさからす一文字のことくして長し 上聲は短くしてすくにのほる 去聲はなまるやうに聲をまはす 入の聲は下にふつくちきの音ありて切直なりと同し平聲の文字なれ共移る文字により聲の上る有 下るあり 譬へは 高座 高聲 高山 紅粉 紅葉 紅花 如此下の文字に引れて音聲かはるなり 余は是にて准へ知へし 江口 紅花の春のあした抔 節に引れて平上去の音の動くは勿論なり （一五頁）

○和語にて平上去の三聲をいはゞ 日ひ 樋ひ 火ひ 橋はし 端はし 箸はし 桐きり 霧きり 錐きり 是等は唱へに依て文字あざやかに分るゝなり 又げんじと計いひて物語の源氏性の源氏を分ち おやこと計いひて父子と親族とを分つも皆となへに依なれは同字といへ共心を込てとなふへき事肝要なり （一六頁）

これをみると、すでに岩淵悦太郎（一九四四＝一九七七、三五七～八頁）も指摘しているように『和字正濫鈔』（元禄八

年〈一六九五〉刊）の影響があきらかである。とくに右第一項の前半はそれとまったく同じであり、第二項の和語の例にも重なるものがある。もちろん独自の記述もみとめられるが、四声認識は契沖のそれにしたがうものであろう。

五

本稿では近世の四声認識（四声それぞれをいかなる音調と認識していたか）について、まず貞丈流のそれを検討した。これと並行して、当時は契沖・宣長流と文雄流の四声認識が行われていたことが知られている。（一〇）

とくに後の二者については、さきに筆者の見解を述べたことがある（上野二〇一九）。それによれば、契沖・宣長も文雄も、当該の語の発端が基準（中位）よりも高くあがるか、低くさがるかを問題にしているのであって、時間の経過とともに徐々に上昇したり下降したりすることを、必ずしも問題にしているのではないように思われる。

しかし、石原正明の『年々随筆』では「いひはしめひくゝ（言始低）やはらかなるか・末やうやくにあかりつよくなる（漸上強）」などと説明しているのであるから、時間的経過を追っていることは否定できない。

また、貞丈の四声認識もあきらかに時間的経過としての上昇や下降をとらえており、前掲の『安斎随筆』巻之三十一にある節博士は左側を起点として、右方向に時間の経過を想定したものである。これらは声明の節博士を髣髴させるが、声明のそれは文字の左側に、右（文字の側）を起点として記されている点において、貞丈のものとは異なる。

これについて『言語国訛』では「二（ニ）上声ノ唱」として、さらに「下ヨリ上ヘ響クヤウニ〜ト上声ノ如ク唱ヘルガ和朝ノロクセ」と記されていることにも注意される。これは右から左へ進行する音調の変化を図示したものであって、必ずしも四声の枠組みだけで音調をとらえているわけではないことが、このような譜記からも明らかである。

また、『謳曲英華抄』の説くところも、一見して「同し（じ）平聲の文字」などということから文字単位の四声観に立つようでいて、例示されたものはみな語単位の四声を問題にしていることに注意すべきである。「節に引かれて平上去の音の動く」という実際を、遺憾ながらいま明らかにしがたいけれども、「紅花」に付された節博士はコウクワ（傍線部を高く）の節付けであり、それと同じ音調を「○紅花」と、「紅」字に差された去声の声点一つをもってあらわしたとすれば、語単位に四声をあてていたものと推定されるのである。

ただここに注意すべきは、近世における四声論で「平声」の位置づけがそれぞれに曖昧なことである。契沖・宣長、その影響下にある『謳曲英華抄』などが、「本末あからすさから

す（ず）」としながらも、実例としてあげたものがみな下降調の語であることは、これまでにも問題とされてきた。また貞丈流の四声認識においても「上り下りなく平かにゆるやか」「聲の調（ママ）字平らかにて上りも下りもせず」（『安斎随筆』）としながら、「平聲のは（本末）もとするゑおなしほ（じ程）となる中に、いさゝか上声へちかき（近）は」（『年々随筆』）などと述べている。「平声」をおおむね平調とみていたことは動かないところであるが、高平調とまでは考えていなかったし、さらに微妙な音調の上がり下がりを内包するものと考えていたのであろう。

近世における四声論は、現代的視点から容易に理解できるものではないことを知るべきである。

注

（一）早稲田大学中央図書館蔵の版本（ヘ 10-4722-2）による。

（二）文中「便」「弁」については、漢語サ変の動詞が連濁するかどうかを発音してみて、そのうえで「発語の輕重をしるへき也」という。正明は両字とも平声とみており、ただその軽重に違いがあると考えていたらしい。そして「平聲のは（本末）もとするゑおなしほ（同程）となる中に、いさゝか上声にちかき（近）はにこるなるへし」というのである。すなわち「弁」はやや上昇調である（上声点が差されるのはこの故か）から「弁ズ」と連濁するのであり、対して「便ス」は下降調である（去声点が差されている）から連濁しないと考えたのであろう。

（三）正明の説明によれば、彼は「からくして」「からうじて」と（傍線部を高く）発音したようであるが、これは京都アクセントにもとづくものかどうか疑わしい。正明の生国は尾張である。

（四）秋永一枝（一九八三、七二頁）に「「院」は去声だが「院宣」の時の「院」は平ら故、「平ヲ兼」というか」とある。

（五）上野和昭（二〇〇一・〇二）による。以下同様。

（六）「夜半」について秋永（一九八三）はとくに述べていないが、「夜半ハ上平ヲ兼テ響」とあるのは、『言語国訛』の編者が、「夜半」にヨワとヨワの両様の音調を認めていたということであろう。

（七）新天理図書館善本叢書10（八木書店 二〇一八）による。

（八）秋永は、「著者は上昇の調子が緩いととったものか」ともいう（七四頁）。本稿もこれにしたがう。

（九）小西甚一（一九四八）によって取りあげられたのが早いが、そこには「實際的經驗から割り出した論らしいけれども、理由は瞭らかでない。かやうな工合に聲調認識

の浸潤した向もあつたことを知る資料としてはおもしろい」（五一〇頁）と述べるのみである。

（一〇）近世の四声論を概観するうえには金田一春彦（一九五一）がそのはしがきに記しているところが参考になる。

参考文献

秋永 一枝（一九八三）『言語国訛 竹柏園旧蔵本影印 ならびに声譜索引』 アクセント史資料研究会

今泉定介編（一八八九）『故實叢書』吉川弘文館（国立国会図書館デジタルコレクションによる）

岩淵悦太郎（一九四四）「謡曲発音資料としての謳曲英華抄」橋本進吉博士記念論文集『国語学論集』岩波書店

上野 和昭（二〇〇一・〇二）『平家正節 声譜付語彙索引』上・下 アクセント史資料研究会

上野 和昭（二〇一九）「本居宣長の四声認識について」『国文学研究』一八七

表 章 伊藤正義 校注（一九六九）『金春古傳書集成』わんや書店

金田一春彦（一九五一）「日本四声古義」『国語アクセント論叢』法政大学出版局、金田一春彦（二〇〇一）『日本語音韻音調史の研究』吉川弘文館に収録

金田一春彦（一九七四）『国語アクセントの史的研究 原理と方法』塙書房（第一版第一刷）

金田一春彦（一九七六）「連濁の解」『Sophia Linguistica』二、金田一春彦（二〇〇一）『日本語音韻音調史の研究』吉川弘文館に収録

小西 甚一（一九四八）『文鏡秘府論考』大八洲出版

坂本 清恵（一九九七）「アクセント資料としての世阿弥自筆能本―声点を中心に―」『国語研究』六〇、坂本清恵（二〇〇〇）『中近世声調史の研究』笠間書院に収録

高羽 五郎（一九六六）『謳曲英華抄 天』私家版

前田 富祺（一九六五）「能楽論におけるアクセント観」『国語学研究』五

前田 富祺（一九六七）「近世における国語アクセント観」『国語学』七一

付記

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究C 18K00625）による研究成果の一部である。

― 早稲田大学文学学術院 ―